

『曲江』 杜甫

曲江 杜甫

曲江

杜甫

朝回日日典春衣  
每日江頭盡醉歸  
酒債尋常行處有  
人生七十古來稀  
穿花蛺蝶深深見  
點水蜻蜓款款飛  
傳語風光共流轉  
暫時相賞莫相違

朝より回って日日春衣を典す  
毎日江頭醉を盡して歸る  
酒債尋常行く處に有り  
人生七十古來稀なり  
花を穿つ蛺蝶深深として見え  
水に點ずる蜻蜓款款として飛ぶ  
傳語す風光共に流轉し  
暫時相賞して相違ふこと莫れと

【語句】

曲江 漢の武帝(前一五六〜八七)が長安城の東南隅に作った池。水流が之の字形に曲折しているため名づけられた。現在は一面畑となっているが当時は長安最大の歓楽地であった。

朝回 朝廷から退出する。

典 質に入れる。

江頭 曲江池のほとり。

蛺蝶 あげは蝶。

蜻蛉 とんぼ。

款款 ゆるやかな様子。

【解釈】

朝廷での仕事を終えて退出すると、毎日春着を質に入  
れ、そのたびに曲江のほとりで酔うまで酒を飲んで帰って  
くる。

だから酒代の借金は当たり前前で、行く先先にあり、  
どうせ人生七十まで生きる人は昔からめったにない(だから  
今のうちに飲んで思い通りに過ごしたい)。

あたりを見回すと、花の中に口先を突っ込んで蜜を吸う  
アゲハ蝶は深い思いで生きているように目に映り、水面に尾  
を触れながら飛ぶトンボはゆったりとした姿に見える。

私はこの春景色にことづつてしたい。わが身も春光もとも

に流れに身を任せ、春のしばらくの間でも互いに褒め合い、  
背くことのないようにしよう。

抜け出せるか貧困と悲運の生活

○この詩の時代背景を知ることから始めよう

七五三 四十二歳 長安に在り、職もなく生活困窮。

七五四 四十三歳 家族を奉県に疎開させる。

七五五 四十四歳 官位の低い武器倉庫番に採用される。

子ども一人を餓死させる。

七五六 四十五歳 安祿山の乱がおこる。家族を鄜州に避

難させる。賊軍につかまり長安に軟禁

される。(このころ「春望」「月夜」が

できた)

七五七 四十六歳

(四月) 長安を脱出し、鳳翔ほうしょうにいる玄宗皇帝の息子肅宗

のもとに行き職を得んとする。

(五月) 忠義を買われて左拾遺を授けられる。

(八月) 敗戦の將軍房琯を弁護して肅宗の怒りに触れ暇

を出される。

(九月) 乱が収まる。長安が回復する。

(十月) 肅宗が長安に入る。

(十一月) 家族を長安に呼び戻す。「曲江」はこのころの作

七五七 四十七歳 房琯ぼうかんが邠州びんしゅう刺史に左遷され、杜甫も連

座して華州の司功参軍という田舎の小  
役人に格下げされる。

七五九 四十八歳 あまりの貧しさのため官を捨て成都に  
向かう旅に出る。

○律儀過ぎて疎んぜられる杜甫

安祿山の乱で長安が侵され、玄宗が成都に逃避したさなか、杜甫は新皇帝を名乗る息子肅宗を訪い、役に立ちたいと願う。その忠義心を買われて、左拾遺の官を賜った。この官は皇帝の間に仕え、皇帝への助言や宣旨の妥当性を検証し、道に外れる場合は諫言する役であり、また賢臣を推薦し、政道を正す名目上重要な役職である。

そのころ小さな戦があり、大将房琯の敗戦の指揮について、杜甫は彼には不備はないと弁護した。どちらが正論であるか定かでないが、房琯は父玄宗の側近であった。しかしいまや玄宗は国を捨てた過去の人である。その一派を弁護するとは不愉快この上ないと肅宗は言って、杜甫に暇を出した。これが彼の下り始めである。

天子への諫言役が主君に襟を正せと言って何の罪か。杜甫は理解できなかつたのだろう。杜甫は世の中の仕組みに疎い所がある。このときの左拾遺は臨時的な役職で、位は従八品であった。九品までしかない官位の末尾に近い。本来は駆け出しの地位である。それを杜甫は官名を

優先させて職務を全うしようとしたのである。律儀者の典型である。肅宗にしてみれば、左拾遺役を設けていけば、皇帝は独裁をやりませんと内外に形式的に知らしめる程度の意味合いしかなかった。誠実な杜甫には世の中の機微が読めなかつたのである。世情に疎いといわれる所以である。

○憂国の詩人はどこへ

今一度この詩に目をやると、あの憂国の詩人「詩聖」と仰がれた人の作品とも思えない。「春望」「登高」にも憂いがあるが、その対象は国家の行く末である。それに対しこの詩の憂いは自分の境遇に対してである。針小で利那的なまま、酒におぼれ、自然の風光にのみ埋没したいと自暴自棄に陥り、生きることに弱気になっている珍しい作品である。

【参 考 ①】

同時に作られた次の詩で当時の杜甫の心境を知ることができる。

曲江对酒

苑外江頭坐不歸 苑外の江頭坐して歸らず  
水晶宮殿轉霏微 水晶の宮殿轉た霏微

桃花細逐楊花落

桃花は細かに楊花を逐うて落ち

黃鳥時兼白鳥飛

黃鳥は時に白鳥と飛ぶ

縱飲久拵人共棄

縱飲久しく拵して人共に棄て

懶朝真与世相違

懶朝真に世と相違ふ

吏情更覺滄州遠

吏情更に覺ゆ滄州の遠きを

老大徒傷未扞衣

老大徒らに傷んで未だ衣を扞はず

(解 釈)

曲江酒に対す

御苑の外、曲江のほとりに私はじっと座ったまま家に帰ろうともしない。水晶のような宮殿はいよいよきららかに輝いている。

桃の花は飛んでいる柳絮を逐うようにして散り、鶯は時折白鳥と連れて遊ぶ。

こうして気ままに酒ばかり飲んでもう久しい間、何もかも投げ捨てた気分になっておれば、人もまた私を見捨ててしまい、朝廷のお勤めもおっくうになるので、ほんとうに世間とお互いに背き合ってしまった。

役人生活などしている心境には、あの滄州の仙境などとはもう遠く隔たってしまったことを感じる。そのくせ、いい年をしながら、いまだ思い切って役人生活を捨て去ろうともせず、我とわが身を嘆くばかりなのである。

(唐詩選)

【参 考 ②】

この曲江の詩が根拠で、わが国では七十歳を「古稀」という。

年齢の異称を記してみる。

十五歳 志学

二十歳 弱冠

三十歳 而立

四十歳 不惑

五十歳 知命

六十歳 還暦

七十歳 古稀

七十七歳 喜寿

八十歳 傘寿・丈朝

八十八歳 米寿

九十歳 卒寿

九十九歳 白寿

